# 「西行の恋歌についての一考察」

西村真一

## 一

西行には、およそ三百首の恋歌がある。西行の歌は、総数約二千百首であるから、三百首という恋歌の数は、決して少なくはないであろう。自己の内面すなわちこころを歌うことを作歌態度の基本にすえていた西行には、述懐の歌や恋の歌が多いのは当然ともいえる。

勅撰集への入集状況をみても、西行が恋歌の作者として、それなりの評価を得ていたことが知られる。こころみに「詞花集」（この集では、西行の歌は読人知らずとして出ている）以下、西行の歌が採られた勅撰集十六について、入集歌の総数と恋歌の数を示すと次のようになる(注1)。（　）内の数字は恋歌の数を示す。

詞花集　一首（〇）
千載集　十八首（三首）
新古今集　九十四首（十七首）
新勅撰集　十四首（二首）
続後撰集　十三首（二首）
続古今集　十首（五首）
続拾遺集　九首（一首）
新後撰集　十一首（〇）
玉葉集　五十七首（七首）
続千載集　四首（〇）
続後拾遺集　三首（一首）
風雅集　十三首（〇）
新千載集　四首（一首）
新拾遺集　九首（〇）
新後拾遺集　三首（〇）
新続古今集　三首（〇）

西行の勅撰集入集歌の総数は二百六十六首であり、このうち恋歌は三十九首である。西行の恋歌の一割強が勅撰集に採られていることになる。

次に、西行の歌が最も多く採られた「新古今集」について、西行以下六人の上位入集者の入集歌の数と恋歌の数とを示すと次のようになる。

1　西行　九十四首（十七首）
2　慈円　九十一首（七首）
3　良経　七十九首（二十首）
4　俊成　七十二首（八首）
5　式子内親王　四十九首（十一首）
6　定家　四十六首（十四首）

数の上では、西行の恋歌は良経についで多いが、入集歌に占める恋歌の割合では、定家・良経についで第三位となる。恋歌の名手とさ

れるのは定家であるが、「新古今集」の十七首をはじめとして、勅撰集に合計三十九首採られた西行の恋歌も、高く評価されていたことを認めてよいだろう。

それでは、勅撰集には西行のどのような恋歌が採られているであろうか。その一例として「新古今集」に入集した西行の恋歌を次にかかげ、その特色をみることにしよう。

(1) はるかなる岩のはざまにひとりゐて人めおもはで物思はばや
(2) 数ならぬ心のとがになしはてじしらせてこそは身をもうらみめ
(3) なにとなくさすがにをしきいのちかなありへば人やおもひしるとて
(4) おもひしる人ありあけのよなりせばつきせず身をば恨みざらまし
(5) あふまでのいのちもがなと思ひしはくやしかりけるわが心かな
(6) おも影の忘らるまじき別れかななごりを人の月にとどめて
(7) 有明は思ひいであれやよこ雲のただよはれつるしののめの空
(8) 人はこでかぜのけしきもふけぬるにあはれにかりの音づれてゆく
(9) たのめぬに君くやと待つ宵のまのふけゆかでただあけなましかば
(10) あはれとて人の心の情あれな数ならぬにはよらぬ歎きを
(11) 身をしれば人のとがとは思はぬに恨みがほにもぬるる袖かな
(12) 月のみやうはの空なるかたみにて思ひもいでば心かよはん
(13) 隈もなきをりしも人を思ひいでて心と月をやつしつる哉
(14) 物思ひて詠むる比の月の色にいかばかりなる哀そふらん
(15) うとくなる人をなにとて恨むらんしられずしらぬをりもありしに
(16) いまぞしる思ひいでよと契りしは忘れんとてのなさけなりけり
(17) あはれとてとふ人のなどなかるらん物思ふ宿のをぎのうはかぜ

右の十七首は、いずれもあわれ深い恋の情趣を優艶にうたい、しかもしみじみとした余情の感じられる歌であって、「新古今集」の歌の理想にかなった歌といえよう。この前提に立って、右の十七首の中に、西行の個性がどのようにあらわれているかを考えてみたい。

(1)は家集にはなく、「新古今集」にのみ見出される歌であるところから、おそらく晩年の作であろうと推定され、西行が最後に到達した恋歌の歌境を示すものである(注2)。「物思ふ」は、いうまでもなく恋の物思いであるが、「はるかなる岩のはざまにひとりゐて」という姿勢に、西行的な深まりが感じられる。こうした歌は、述懐の歌とつながる性格を内容にもっている。

後朝の別れを詠んだ(6)や(7)は、調べもなだらかで、優美な恋の情致を盛り、かつ余情の感じられる歌である。同様に、(8)、(14)、(17)なども、恋の情趣を季節の風物と融合させて巧みに詠み、あわれ深さが漂う。勅撰集の恋歌の理想にまさしくかなう、ととのった姿をもつ恋歌である。

西行が、晩年の歌論書「西公談抄」で、歌は「古今集」の風体をもととして詠むべきであるといっていることは、よく知られている。これは、当時としては、いわば一般的な考え方で、西行独自の考え方がうかがわれるわけではないが、とにかく西行が、歌のあるべき姿として「古今集」の歌を描いていたということを、まず確認しておく必要があるだろう。

「西公談抄」の中で、西行が恋歌の秀歌例として挙げているのは次の三首である。

松嶋や雄島が磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか
（「後拾遺集」・源重之）

難波江の藻にうづもるる玉柏あらはれてだに人を恋はばや
（「千載集」・源俊頼）

今日こそはいはせの森の下紅葉色にいづれば散りもこそすれ
（「金葉集」・源兼昌）

これらの歌は、いずれも、洗練された技巧によって、恋の情趣を巧みに詠んでおり、「古今集」の流れに立って、恋歌の理想を示す歌であるにはちがいない。当時、もっとも好まれたのは、こうした流麗な恋歌であっただろう。したがって、西行も「古今集」や右に代表されるような歌によって、若い頃から恋歌を学んできたものと思われる。

ところが、右のような歌と「新古今集」所載の西行の恋歌とを比較してみると、西行が理想と考えた歌の姿と実際の作品とが必ずしも一致していなかったことがわかる。西行の恋歌の中には、「古今集」の歌の模倣におわり、個性の感じられぬ凡作も少なくないが、「新古今集」所載歌をはじめとする秀歌は「古今集」の伝統を受けつぎながら、それを一歩、独自の領域において深めた歌なのである。そして「新古今集」所載の恋歌にも、他の歌人の恋歌と比較したとき、西行的なものがあらわれていることに気付かれる。その西行的なものとは何かという問題を、先の十七首の歌に即して考えてみたい。

西行が、体験を通して歌うタイプの歌人であり、現実的な歌風の持主であることは誰でも指摘することである。「新古今集」所載の十七首の恋歌にも、作風の特色がみられるとすれば、それはまず第一に、体験に基づく実感的な作風ということであろう。

(3)や(6)などに在俗時代の恋愛体験が影を落としているという見方は、通説のようになっており、直観的な見方のようであるが、それは正しいと思われる。恋愛中もしくはそうしたことを体験した直後に詠まれたとは限らなくとも、広い意味で体験に基づく歌、恋の思い出の歌ということができよう。西行は、現実を直視し、人生上の出来事とまともに向き合うタイプの人間であったことは、他の歌でも傍証できるし、とくに恋愛に関しては、鋭い感受性でそれを受けとめ、その体験的な事実を老年期まで大切にあたため続けたように思われる。

西行の家集「聞書集」に、「嵯峨にすみけるにたはぶれ歌とて人々よみけるを」という詞書を付した十三首の連作がある。それらは幼少期を回顧して詠んだ現実的な歌であるが(注3)、そこに次のような歌がある。

恋しきをたはぶれられしそのかみのいはけなかりし折の心は

もとより右の歌の素材は、幼少期のささいな一事件であろうが、そこに生じた幼い日の心のゆらぎを老年に至っても鮮かに記憶しており、それを柔軟な表現で右のような歌に詠んでいることに注目しなければならない。

それゆえ、青年期の西行の心を大きく動かした恋愛がもしあったとしたなら、その体験は、後々まで西行の心に残り、その思い出を再構成するような形で、(3)や(6)の歌が詠まれたにちがいない。

(2)や(11)における「数ならぬ心のとが」とか「身を知れば人のとがとは思はぬに」といった発想と表現も注意する必要がある。「数ならぬ身」すなわち人の数にも入らぬような卑しい身、とか「身を知る」すなわちそういった卑しい身であることを認識するといういい方は、当時の恋歌の常とう的な表現の一つである。これは、恋歌が

満たされた恋の喜びを歌うというよりは、恋の憂悶を歌うものであるという、当時の恋歌の発想と関連づけて考えられるが、西行の場合、こうした表現が観念的な表現におわらず、実感的な響きをもっているといったら、あまりに在俗時代の恋愛を強く想定しすぎることになろうか。

西行は、北面の武士として宮廷に仕えていた時期に、さる上臈の女房との身分違いの恋におちた、ということは説話にも出ている(注4)。そして、その女性に対する失恋が、西行の出家の原因になったといわれている。はたしてそうした深刻な恋愛体験があったのか、それとも青年期特有のおぼろな恋愛にすぎなかったのかさだかではないが、歌はやはり恋愛体験の存在を暗示しているように思われる。そして(2)の歌は、現実体験を反芻し、自己省察を反復する過程において詠みなされたものであろう。

(2)の歌は、現実体験に基づく実感の匂いのする歌である一方、西行特有の思弁的・論理的傾向をもった歌でもある(注5)。(2)の歌の意味は、「つまらぬ身の程の自分ゆえ、心に抱いた罪とは思うまい。自分の思いを相手に知らせたうえで、だめならはじめて、わが身を恨みに思おう」と解釈される。またこの歌には

数ならぬ心のとがになしはてて知らせでこそは身をも恨みめ

という句形もあり、その場合は「つまらぬ身の程のわが身ゆえ、自分の心の罪にしてしまい、相手に気持を知らせることもせず、ひたすらわが身を恨みに思うことにしよう」という意味にとれる。そもそも恋歌には、こういう複雑な恋愛心理のあやを詠んだ歌は多いのであるが、とくに西行にはそうした内容の歌が多い。なかには、かなり複雑で屈折した内容を盛り込もうとするあまり、形象化が不完全であったり、散文化の方向をとる歌もある。(2)の歌も、一首全体としては、感傷性よりも論理性の勝った歌といえるであろう。

(15)も「お互いに、知られず知らぬ時もあったのだから」という下句は、「疎遠になってゆく人をどうして恨みに思おう」という決意を導き出す理由を倒叙法によって示しているわけだが、そこには、感情に流れようとする自己を理知的に抑制しようとする態度がみられる。婉曲な形はとっているが、かなり理屈っぽい歌といえるであろう。

同じような傾向の歌として

嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな

という「小倉百人一首」の歌がある。この歌は従来、その感傷的な面が強調されすぎ、西行の人間像と結びつけて鑑賞されてきたが、それは誤まった理解であると思われる。内容としても複雑なものを盛り込んでおり、表現も流麗というよりは屈折して生硬さが目につくのである。しかし、そこに西行の和歌の特徴があらわれているともいえ、多くの西行の恋歌の中から、定家がこの歌を撰び入れているところに、定家の西行理解の態度がうかがわれる。

内容に複雑な心の動きを盛りこむためには表現はそれなりのひろがりを持たなければならない。西行の歌には、句切がなく一気によみ下されたものも少なくはないが、むしろ、初句切、二句切、三句切など上句に感動の重点がおかれている歌や同語の反復・口語的な表現を用いて、心情をさながら表現しようとする歌が目立って多いのである(注6)。「新古今集」所載の十七首の中でも、(2)、(3)、(6)、(10)、(15)、(17)の六首が三句切であり、(7)と(16)がそれぞれ二句切と初句切である。これらは、初句または三句までに感動の重点がおかれてその結果、調べのなだらかさにおいてやや欠ける場合がある。しかし、こうした自在な表現力は、同時代の歌人にみられぬ、西行独自

のものであったのである。

しかしながら、勅撰集の恋歌は、恋愛心理をうたっても、あまり切迫した生々しい感情表現は避けるのが常であったから、後で述べるように、西行の個人的な家集にみられるような、はげしい心情表現の歌は「新古今集」の採るところではなかった。いいかえれば、「新古今集」に採られた十七首の恋歌は、個性的とはいっても自づと限界があり、そこに西行の恋歌の本領が発揮されているとは必ずしもいえない。それらは、おおむね、選者たちの好みにかなった穏健な作品なのである。しかし、西行を「新古今集」第一位の歌人として、九十四首の歌を撰び入れた選者たちは、西行の資質の何たるかを理解していた筈であるし、西行の個性を最大限に受容しようとしたにちがいない。その受容の限界を示すものが「新古今集」所載の十七首の恋歌だったのである。

だが、こうした受容の限界は、微妙な問題をもっている。たとえば、(2)の歌は、「新古今集」には、藤原家隆が選んで採っているが、後の「隠岐本新古今集」では、後鳥羽院が削除しているのである。しかし、西行にとっては自信作であったらしく、彼は、晩年の自歌合の「御裳濯河歌合」にこれを選び入れている。ところがこの歌合の判者の藤原俊成は右歌の、

もらさでや心の底をくまれまし袖にせかるる涙なりせば

を勝として、(2)を負としているのである。西行の歌の受容には、このような評価のゆれがかなりつきまとったことが推測されるのである。窪田章一郎氏は、このような問題をめぐって、「西行の恋歌のうちもっとも積極的な面をもつ一首（注・(2)の歌）が、ついには勅撰集的歌風の中に収まり得ずに、はみ出してしまったことを知るのである。――特殊にすぎるとされたのである。――語気の強さが〝優艶〟をそこなうという点と、多分に体験的な実感をもっている個人性のはげしさという点が特殊であると認められたのである。」といっている(注7)。(2)が、西行の恋歌の中で、「もっとも積極的な面をもつ一首」であるとは必ずしもいえないと思うが、おおむね、右の見解は妥当である。

「新古今集」における定家の恋歌を次にいくつかあげてみよう。

としもへぬ祈る契りははつせ山をのへの鐘のよそのの夕暮

帰るさの物とや人のながむらん待つ夜ながらの有明の月

忘れずばなれし袖もやこほるらんねぬ夜の床の霜のさむしろ

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く

かきやりし其のくろかみのすぢごとに打ちふす程は面影ぞ立つ

このような歌と西行の十七首の歌を比較してみると、勅撰集が受容し得るぎりぎりの線において、西行の歌の個性がひときわ強い光を放っていることが、改めて知られるのである。

## 二

前節において、勅撰集に撰入された西行の恋歌の特色を「新古今集」所載歌を中心に検討した。そして、それらが、全体の作風としては、新古今風の優美な作風を示しているが、個々の歌には、西行の個性が強くうち出されていることを明らかにした。そこで次に、西行の家集「山家集」の恋歌、とくに勅撰集に入っていない歌を中心に、作風の特徴を考えてみよう。

「山家集」には、恋の部に百四十三首の恋歌があり、他に雑の部に入っている恋歌が百二十二首ある。これらの歌の排列の状況は次の通りである。（数字は、日本古典全書「山家集」の歌番号を示す。）

(A) 631～670　題詠
(B) 671～675　「恋の歌五首よみけるに」という詞書をもつ連作
(C) 676～678　「こひ三首よみけるに」という詞書をもつ歌
(D) 679～715　「月に寄する恋」という題による三十七首
(E) 716～774　「恋」という題による五十九首
(F) 1330～1441　「恋百十首」（実数は百十二首）
(G) 1584～1593　百首歌の中の「恋十首」

まず(G)の百首歌は「山家集」の雑の部の巻末にあり、西行の百首歌ではただ一つ、完全な姿をそなえたものである。この百首歌は、年少期に成立したものであると推定されており、その理由として、晩年の自歌合である「御裳濯河歌合」と「宮河歌合」には、ここから一首も歌が採られていないこと、「夫木抄」に三首採られた他は勅撰集にも全く歌が採られていないことなどがあげられる(注8)。同じ百首歌の中の「述懐十首」に、明らかに出家前後の心境を詠んだものがあることからしても、出家前後の若い時代の成立とする見方に従いたい。

さて、この百首歌が、西行の若年期の作品を集成したものであるとすると、その中の「恋十首」は、西行が若い頃、どんな恋歌を詠んだかということを知る手がかりになる。もし、出家の原因になったと考えられているような深刻な恋愛体験があったなら、それがこの「恋十首」の歌に反映しているのではあるまいかと予想される。しかし、こうした予想は、ほぼ完全に裏切られるといってよい。次にその十首の歌をすべてあげてみよう。

(1) わが妹がそのにうゑたる唐なづなたれなづさへとおほしたつらむ
(2) くれなゐのよそなる色はしられねばふでにこそまづそめはじめつれ
(3) さまざまのなげきを身にはつみおきていつしめるべきおもひなるらむ
(4) きみをいかでこまかにゆへるしげめゆひたちもはなれずならびつつ見む
(5) こひすともみさをに人にいはればや身にしたがはぬ心やはある
(6) 思ひいでよみつのはま風よそだつとしがのうら波たたむたもとを
(7) うとくなる人は心のかはるともわれとは人に心おかれじ
(8) 月をうしとながめながらも思ふかなその夜ばかりのかげとやは見し
(9) 我はただかへさでをきむさよ衣きてねしことを思ひいでつつ
(10) 川かぜにちどりなきけむ冬の夜はわが思ひにてありけるものを

右の十首は、恋の初めから終りまでの経過を時間の順序にしたがって整然と排列した連作である。またこれを題詠の集積とみることもできる。作風の点では、(3)や(4)に最もよくあらわれているように、「古今集」以来の伝統的な手法によって、恋の情調を技巧的に詠んだ歌が大半を占め、おおむね平凡である。これらの歌にみる限り、当時、西行の心を大きく動かしたと思われる恋愛体験の影はほとんど見られぬし、西行の内面的世界を掘り下げてゆく手がかりもないといってよい。ただ(5)の歌の「身にしたがはぬ心やはある」という表現に、わずかに西行独自の思考の型をみることができる(注9)。

しかし、(5)がはたして現実の体験に基づいて詠まれた歌かどうかは明らかでなく、むしろ、こうした作品は、体験が直接投影されているというよりは、「恋にある身」、「もの思ふ身」をさまざま想定して、それを多くの角度から照射し、そこに生まれた想念を詠むと

いうようなものではなかっただろうか。

それにしても、わずかに(5)の歌に西行の個性がみられるだけで、あとは、伝統的な恋歌をなぞったような歌におわっているのは、現実的な作風をもつ西行の青年期の恋歌としては、いささか不可解な思いがする。これは、意識的になされたことであろうか。窪田章一郎氏は、この間の事情を次のようにみている。まずこの「恋十首」は、題詠をもって構成した連作であるから、直接に体験的なものは対象になっていないこと、そして体験的な世界をもって連作とすることには苦痛があったので、恋愛の真実は回避され、秘めようとする態度がはっきり立てられたこと、以上の二点から、このような体験的な世界から切り離された恋歌が詠まれた、というのである。そして窪田氏は、西行に恋愛体験があったことを認める立場に立つことを明らかにしている(注10)。

右のような見解は、おそらく正しい見解であろう。西行に、現実の恋愛体験を隠すべき内的もしくは外的な理由があったという可能性は、充分考えられるし、おし隠す以上はそれを徹底しようという意志の強さを西行は持っていたからである。この「恋十首」に続く「述懐十首」には次のような歌がある。

山ふかく心はかねて送りてき身こそうき世を出でやらねども

雲につきてうかれのみゆく心をば山にかけてをとめむとぞ思ふ

すててのちはまぎれしかたはおぼえぬを心のみをば世にあらせける

ふりにける心こそなほあはれなりおよばぬ身にも世をおもはする

「述懐十首」につづく「無常十首」には次のような歌がある。

うつつをもうつつとさらにおぼえねば夢をも夢と何かおもはむ

うらうらと死なんずるなど思ひとげば心のやがてさぞとこたふる

これらは、出家前後の西行の心を知る重要な歌であり、他にもこの時期の真摯な自己省察を歌った作品がある。こうした述懐や無常の歌を詠んだ当時の西行が、恋歌においてだけ絵空事のような文字を連ねて題詠の世界に遊んでいたとは考えられぬから、真実を秘めるべき何らかの事情があって、韜晦の姿勢の中から「恋十首」のような作品が生まれたのではなかろうか。

しかしながら、恋愛の体験は、西行の精神の内部に深く定着したと思われる。出家の後も西行は、その経験を胸中にあたため続け、恋歌の発想の根源としたのである。そして、全く新しい独自の恋歌の領域へと歩みをはじめたと考えられる。その独自の領域とは、いったいどんなものであったかを、(D)、(E)、(F)の歌群によって考えてみたい。

(D)は「月に寄する恋」三十七首であるが、このような寄物の恋歌が、三十七首もまとまって存在するのは、他の私家集にみられぬ特色である。この三十七首は、「月に寄する恋」という題で一括されて並んでいるとはいえ、一時にまとめて詠まれたものではない。この三十七首の中には、ほかのテキストでは「恋」、「月前恋」、「述懐の心を」、「月の歌よみける中に」、「月」、「恋歌の中に」といった別の題をもつ歌が混じっているから、編さん者が、同じテーマによる歌を便宜上ここに並べたというにすぎない。

しかし内容の上では、この三十七首は、(A)の題詠歌群とは比較にならぬほど充実しており、個性豊かな作風を示している。ちなみにこの三十七首の歌のうち、勅撰集に採られた歌は九首あり、「夫木抄」、「万代集」、「雲葉集」などの私撰集にも五首採られている。また後年西行は、自ら選んだ「御裳濯」、「宮河」両歌合にも次の三首を選び入れている。

しらざりき雲井のよそにみし月のかげをたもとにやどすべしとは
なげけとて月やは物を思はするかこち顔なるわがなみだかな
おもひしる人ありあけのよなりせばつきせず身をばうらみざらまし

「新古今集」所載の十七首の恋歌の中に、在俗時代の恋愛体験が暗示される実感的な歌がいくつか存在することを、前節で指摘した。この「月に寄する恋」三十七首の中にも、それと同じ系列の歌がある。それは次のような歌である。

(1) しらざりき雲井のよそにみし月のかげをたもとにやどすべしとは
(2) ゆみはりの月にはずれて見しかげのやさしかりしはいつか忘れむ
(3) 月をみる心のふしをとがにしてたよりえがほにぬるる袖かな
(4) きみにいかで月にあらそふ程ばかりめぐりあひつつかげをならべむ
(5) よよ経ともわすれがたみのおもひ出はたもとに月のやどるばかりぞ
(6) おもかげに君がすがたをみつるよりにはかに月のくもりぬるかな

(1)の「雲居のよそにみし月」は、禁中の高貴な女性であるという解釈と、民間の女性をさすという解釈がある(注11)。(2)の「ゆみはりの月にはづれて見しかげ」も何を意味するか、実体ははっきりしない。しかし、月に寄託されてうたわれているのは、宮廷の女性とみるのがふさわしいのではなかろうか。北面の武士であった西行の心を動かし、彼が憧憬の心をもって眺めた女性が、月という、浪漫的な心を誘うことばのイメージによって暗示され、その女性に対する思慕の情が婉曲に表現されていると思われるのである。

(4)や(5)や(6)なども、体験に基づく実感の匂いのする歌である。しかし、体験そのものは具体的に示されておらず、基底に深く沈められているので、歌は恋のあわれをたたえた余情の歌になっている。

しかしながら、「月に寄する恋」三十七首には、右のような歌とは少し趣きのちがう歌もある。

(1) ものおもふ心のたけぞしられぬるよなよな月をながめあかして
(2) おもひいづることはいつともいひながら月にはたへぬ心なりけり
(3) よしさらばなみだのいけに身をなして心のままに月をやどさむ
(4) ものおもふ心のくまをのごひすててくもらぬ月をみるよしもがな
(5) ともすれば月すむ空にあこがるる心のはてを知るよしもがな

右は、いずれも勅撰集には採られなかった歌であるが、それだけに、勅撰集入集歌よりもいっそう積極的な心情表現がみられる。また、ここに歌われている「思ひ」や「心」は、もちろん恋という限定をもっているが、心全体に思いを致して、心の実相を追求しようという態度から生れた歌ということもできる。

たとえば、(5)などは、恋歌の枠を破って、むしろ述懐の歌の方向に近づいている。月の澄む(恋人が住むとの掛詞)空にあこがれてゆくわが心を知る方法(恋人が知ってくれる方法)はないものであろうか、と解せば、紛れもなく恋歌であるが、果てしなく月にあこがれ出づるわが心をもてあつかいかねている自己告白の歌とも理解できる。この歌はそうした意味で、「山家集」秋の部の月の歌である

ゆくへなく月に心の澄みすみて果てはいかにかならむとすらむ

かげさえてまことに月のあかき夜は心も空にうかれてぞすむ

などと重なるし、

さらぬだにうかれてものを思ふ身の心をさそふあきの夜の月

というような雑の部の述懐歌とも内容はほとんど一致するといってよいであろう。

(3)の歌は、「述懐の心を」という題をつけて載せているテキストもあるし、次のような恋歌も、あるテキストによれば「述懐の心を」という題の歌である。

うきふしをまずおもひしるなみだかなさのみこそはとなぐさむれども

たのもしなよひあかつきのかねのおとにもの思ふつみもつきざらめやは

これも、テキスト間の本文異同の問題ではなく、西行の歌が、四季の歌にせよ、恋の歌にせよ、述懐的な要素が濃いために(注12)、内容の分類が困難であるという事実を示していると思われるのである。

以上のように、「月に寄する恋」三十七首の中には、勅撰集所載の恋歌よりも、いっそう積極的で、内容においても、恋歌の範囲をこえて述懐の歌に近いようなものがみられる。そして、これに続く(ロ)の「恋」五十九首の中には、更に激しい感情内容をもち、それを豊かな表現力で自在に表現した歌が見出される。それは次のような作品である。

(1)　なにとこはかづまへられぬ身の程に人をうらむるこころありけむ

(2)　かかる身におふしたてけむたらちねの親さへつらき恋もするかな

(3)　おぼつかななにのむくいのかへりきて心きたむるあだとなるらむ

(4)　かきみだる心やすめのことぐさはあはれあはれとなげくばかりぞ(注13)

(5)　ひとはうしなげきはつゆもなぐさまずさはこはいかにすべき心ぞ

(6)　あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世もかくや苦しかるべき

これらの歌をみれば、同じ西行の恋歌ではあっても、勅撰集入集歌とはかなり異なった作風であることが理解できるであろう。

「恋」五十九首からは、「新古今集」に九首、「続古今集」に一首入集しており、晩年の「御裳濯」、「宮河」両歌合にも合計八首の歌を採っているから、全体としての水準はかなり高いとみてよいし、西行自からも恃むところのある作が多かったであろう。しかし右にあげた六首はすべて勅撰集には採られておらず、かわりに西行は(2)を「御裳濯河歌合」に、(6)を「宮河歌合」に選んでいるのである。このことから、右のような諸作が、勅撰集の恋歌からははみ出すような性質の歌であったこと、しかしながら西行は秘かにそうした歌に自信をもっていたのではないか、ということが考えられる。そこで、作品に即してこれらの歌の独自性を明らかにしよう。

(1)の「かづまへられぬ身」は「数ならぬ身」であり、かかる自己認識が、現実体験に基づいていることは先に述べた通りである。この歌では、「なにとこは」という口語的な響きをもつ強いことばを初句において、強烈な感情を表出している表現の特色に注目したい。このような口語的な表現を歌にとり入れることは、西行がしばしば用いる手法であり、(4)の「あはれあはれ」とか(5)の「さはこはいかに」という表現にもみられる。自在で奔放な感情表現の手法の

一つといえるものである。

(2)は、(3)や(6)ともあわせて、西行の恋愛観を知る上で注目される歌である。

(2)の「たらちねの親さへつらき恋もするかな」は、一見、調子のよい響きをもっているが、おそらくそれが恋愛体験のさなかにおいて発せられたものであるが故に、生々しく感じられるのである。また、(2)にわずかにみられる前世＝現世＝来世の観念は、次の(3)において明確に歌のテーマとしておし出されてくるものである。

(3)では、現世において恋に執着する身を罪業とみ、それが前世におけるいかなる罪障によるものであろうかと問うている。更に(6)では、現世において恋の煩悩に苦しむわが身を「この世はよしやさもあらばあれ」と一旦は肯定しつつも、下句では「来む世もかくや苦しかるべき」と否定的に詠嘆している。仏道に思いを寄せる身として、恋は紛れもなく罪障である。しかし、罪業としての恋に執着する自己もまた真実である。こうした悩みを抱いて、西行は自問自答をくり返すのである。出家前後の歌には、そうした自己凝視、自己省察の歌が多い。(6)などは、その末に発せられた詠嘆であり、叫びであるとも考えられる。(6)の歌の前に次のような歌がある。

いかにせむ来む世のあまとなるほどもみるめかたくてすぐるうらみを

ものおもふなみだややがてみつせがは人をしづむるふちとなるらむ

右の歌に詠まれているような罪業意識は、当時の歌にも決して少なくない。しかしこれを(6)のような表現で、はげしく歌ったのは、西行ただひとりであったといってもよいのである。

なお、右の歌と関連して、「聞書集」の「地獄絵を見て」という連作が想起される。この二十七首の連作は、地獄で亡者が苦艱にあうのを描いた絵をモチーフとしているが、その中に「黒き炎の中に、をとこ女もえけるところを」という場面を詠んだ次のような歌がある。

なべてなきくろきほむらの苦しみはよるのおもひの報いなるべし

わきてなほ銅の湯のまうけこそこころに入りて身をあらふらめ

塵灰にくだけはてなばさてもあらでよみがへらすることのはぞうき

あはれみし乳房のこともわすれけり我がかなしみの苦のみおぼえて

たらちをのゆくへを我も知らぬかなおなじほのほにむせぶらめども

右のような歌は、先の(2)、(3)、(6)などにおける罪業意識をいっそう内的に深めた歌として恋歌との関連がもう一度検討されなければならないと思われる(注14)。

「恋」五十九首は、西行の若い時代の歌を多く集めていると考えられている。それだけに、切実な現実体験をとどめている歌が少なくなく、そのあらわれ方は、勅撰集所載の恋歌よりもはっきりしている。また、表現においても、かなり激しい調子の歌が多くみられることを明らかにしてきた。そして、それらの歌は、あまりに個性のあらわれ方が強いために、勅撰集の採るところにはならなかった。しかし実は、こうした歌にこそ、西行の恋歌の独自性が認められるのではなかろうか。

さて、(ㄈ)の「恋百十首」は、形態や成立についていろいろの問題があり、量的にも、西行の恋歌の約三割を占めるものであるから、これについては、稿を改めて考察したい。ただ、

あふ事のなくてやみぬる物ならば今みよ世にもありやはつると
こころから心に物を思はせて身をくるしむるわが身なりけり
とにかくにいとはまほしき世なれども君がすむにもひかれぬるかな
あふと見しその夜の夢のさめであれななながきねぶりはうかるべけれど

などの歌を、(D)や(E)における非勅撰集的な恋歌の系譜につながるものとして指摘するにとどめたいと思う。

## 三

これまで「新古今集」入集歌と「山家集」の恋歌で勅撰集に採られなかった歌を中心に西行の恋歌の特色を明らかにしてきた。そこで最後に、西行が最晩年に自ら選んだ歌合である「御裳濯河歌合」と「宮河歌合」の恋歌について考察したい。

「御裳濯河歌合」は、三十六番、七十二首の歌から成っており、判を藤原俊成に依頼したものである。成立の時期は、はっきりしないが、西行が七十歳前後に自らまとめた歌合であろうと考えられている。一方、「宮河歌合」は、形式は「御裳濯河歌合」と同じで、判を藤原定家に乞うたものである。この歌合は、文治三年に成立し、翌々文治五年八月に定家の判を得て完成した。西行はその翌年、建久元年二月に世を去ったから、最晩年に成った歌合といえる。この二つの歌合に選ばれた恋歌は、次の十六首である。

(1)　数ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそは身をも恨みめ
　　(二十四番左)
(2)　もらさでや心の底をくまれまし袖にせかるる涙なりせば
　　(二十四番右)
(3)　あやめつつ人知るとてもいかがせむ忍びはつべき袂ならねば
　　(二十五番左)
(4)　頼めぬに君来やと待つ宵のまの更けゆかでただ明けなましかば
　　(二十五番右)
(5)　世を憂しと思ひけるにぞなりぬべき吉野の奥へ深く入りなば
　　(二十六番左)
(6)　かかる身におほしたてけむたらちねの親さへつらき恋もするかな
　　(二十六番右)
(7)　人は来で風のけしきも更けぬるにあはれに雁のおとづれてゆく
　　(二十七番左)
(8)　もの思へどかからぬ人もあるものをあはれなりける身の契りかな
　　(二十七番右)
(9)　なげけとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな
　　(二十八番左)
(10)　知らざりき雲居のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは
　　(二十八番右)
　　以上「御裳濯河歌合」
(11)　身を知れば人のとがとは思はぬに恨みがほにも濡るる袖かな
　　(三十四番左)
(12)　なかなかに馴れぬ思ひのままならば恨みばかりや身につもらまし
　　(三十四番右)
(13)　あはれとてとふ人のなどなかるらむもの思ふ宿の荻の上風
　　(三十五番左)
(14)　思ひ知る人ありあけのよなりせばつきせず身をば恨みざらまし
　　(三十五番右)
(15)　あふとみしそのよの夢のさめであれな長きねぶりは憂かるべけ

れど　（三十六番左）

⑯ あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世もかくや苦しかるべき　（三十六番右）

以上「宮河歌合」

この二つの歌合には、晩年の歌が中心に選ばれており、西行が、長い歌人としての生涯の最後に到達した円熟した歌境をみることができる。それと同時に、西行が、自己の作品の総決算ともいうべきこの歌合にどのような歌を選んでいるかをみることによって、西行自身の作品に対する評価が知られるのである。

ここでは、二つの歌合における恋歌を考察の対象にする。ここに選ばれた十六首の恋歌のうち、両歌合に初出の歌は、二十四番右・二十五番右・二十六番左・二十七番左の四首のみで、残りの十二首はすべて、「山家集」および「異本山家集」の重出歌である。「山家集」は、西行が六十歳頃までの歌を主として集めたものであるから、この十二首は、六十歳以前の作、しかもかなり若い頃から長い時期に亘って詠まれた歌と考えられる。両歌合は、晩年の歌を中心に選んでいると先に述べたが、恋の歌だけは、むしろ若い時代の歌が主力になっていると考えられるのである。

この十六首のうち、勅撰集には十首採られており、勅撰集に採られなかったのは、(2)、(3)、(5)、(6)、(12)、(16)の六首である。約六割が勅撰集に選ばれた恋歌なのである。

またこれらの歌については、すでに考察した歌が多いので、作品のすべてを検討することは省略して、いくつかの作品について、俊成と定家の判詞との関連において考えてみたい。

判者の俊成は、「御裳濯河歌合」の恋歌のすべてについて、「心深し」または「心あり」または「をかし」ということばを用いて批評している。それらの歌は、「心深し」という点では、ぬきんでてすぐれていると評価されたのである。なかでも、二十八番の歌については「左右両首、ともに心深く姿優なり、よき持と申すべし」と最高の評価を与えている。俊成は、こうした歌こそ、恋歌の理想的な姿と考えていたことが知られる。したがって、「千載集」や「新古今集」に選ばれた西行の歌もこの理想に合うものであった。心深く、詞もととのって優美な歌、恋の情趣をあわれ深く詠み、しかも余情の美が漂う歌が恋歌の理想とされ、この基準にかなう歌が勅撰集には撰入されたのである。

左右とも高く評価された二十八番の歌に対して、二十四番の歌の判詞をみると、「両首の恋、ともに心深しといへども、右なほ由ありと聞ゆ。勝るべくや」とあるのが注目される。西行の個性は、むしろ左歌に強くあらわれていると思われるが、よき歌の姿を形成するためのなだらかな詞の続き柄を重視した俊成は、左歌のやや思弁的で生硬な表現が、詞のなだらかさにおいて劣るとみたのである。

「宮河歌合」では、三十四番の歌について、定家は、内容と表現の両面において西行の個性が強く出ている左歌を斥け、「左も心ありけるやうなれども、右なほ優にきこえ侍れば」として、右歌を勝としている。また、三十六番については、「両首の歌、心ともに深く、詞および難きやうに見え侍るを、右のこの世とおき、来ん世といへるも、ひとへに風情を先として詞をいたはらず見え侍れど、かやうの難は、この歌合にとりては、すべてあるまじきことに侍れば、なぞらへてまた持と申すべからん」と批評している。詞をいたわる歌人であった定家には、「この世」とおき、「来ん世」と受けた詞句の類似性が欠点と思われたのである。しかし、この歌は、初句に

「あはれあはれ」という同語反復の感動詞をおき、初句と第三句が字余りであるという表現自体、きわめて異色である。しかも内容においても、恋歌の範囲をこえて、述懐や無常の歌につながる性格をもっている。そして感情表現の強烈さという点では、西行の歌の中でも、もっとも強いものの一つである。内面からほとばしるような思いを詠嘆したこの歌が、勅撰集の理想からは余りに遠いものであったのはいうまでもないであろう。

俊成にせよ定家にせよ、西行の右のような歌にこそ彼の個性があらわれていることは、もとより認めていたが(注15)、これらは、勅撰集に採るべき性質の歌ではなかったし、歌合においても、歌の姿において端正さに欠けることが難点であると批判したのである。

しかし、西行が最晩年の自歌合の末尾に、敢えて⑯のような歌をおいたところに西行の強い自信をみることができる。そして、こうした歌につながる一連の歌にこそ、西行の恋歌の独自性が認められるといってよいであろう。

## 注

1　歌数は「和歌文学大辞典」による。

2　(7)も同様に、「新古今集」にのみ見出される歌である。

3　川田順氏は「たはぶれ歌」の成立を文治三年以後とみている（「西行の伝と歌」）。その説に従えば、西行の最晩年の作になる。

4　「源平盛衰記」他。

5　西行の歌の論理的・思弁的傾向については、拙稿「西行歌風の特色――その表現について――」（「信州大学教養部紀要」第四号）で論じた。

6　西行におけるこのような表現技巧には、源俊頼の影響があることを先に論じたことがある。（拙稿「西行における源俊頼の影響」・「日本文芸論稿」第一号）

7　「西行の研究」第四篇・作品論

8　「西行の研究」第四篇・作品論

9　久保田淳氏は、この歌をはじめ、西行の恋歌に、しばしば「みさを」ということばが用いられていることに着目して、その意味を考察された。（「新古今歌人の研究」第一篇・西行の研究）

10　「西行の研究」第四篇・作品論）

11　それぞれ、川田順氏・尾崎久弥氏などの説に代表される解釈である。

12　西行の和歌における述懐的要素については、拙稿「西行の述懐歌」（「文芸研究」第五十四集）で、くわしく論じた。

13　この歌は、和泉式部の「忍ぶべき人もなき身はある時はあはれあはれといひやおかまし」を本歌とするが、両者が、本歌取と本歌の関係にあるというだけでなく、西行と和泉式部の歌人的資質の類似性が考えられる。

14　山本幸一氏が「西行歌風の形成」（「国語国文研究」27）で、この点について触れている。

15　定家は「宮河歌合」の九番左の「世の中を思へばなべてちる花の我が身をさてもいづちかもせむ」という歌について、「左歌、世の中を思へばなべてといへるより、終りの句の末まで句ごとに思ひ入れて、作者の心深くなやませる所侍ればいかにも勝侍らむ」と歌の本質を鋭くついた判を加え、西行をいたく欣ばせたことが「贈定家卿文」によって知られる。

## Summary

### A study on Saigyô's love-poem

Shinichi NISHIMURA

The purpose of this paper is to show the characteristics of Saigyô's love-poem.

In the first chapter, I have considered Saigyô's love-poems in "Shinkokin-syû." They have very elegant style. At the same time, however, it cannot be denied that there are some characteristic styles different from the styles of other poets' love-poems.

In the second chapter, I have dealt with love-poems in Saigyô's anthology "Sanka-syu," According to my opinion, we find the most characteristic style of Saigyo's love-poem in some works in this anthology.

In the third chapter, I have mentioned some works in "Mimosusogawa-utaawase" and critics by Shunzei and Teika.

In conclusion, I may say that the most characteristic style of Saigyô's love-poem lies in his some works in "Sankasyû" and "Mimosusogawa-utaawase."